

IV-23

日本の都市像に関する景観工学的研究

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
 岩手大学工学部 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学工学部 ○学生員 和田 俊広

1. はじめに

現在の日本の都市は、その多くが江戸時代の城下町を基盤としている。なかでも、岩手県の中核都市盛岡は、三方を山に囲まれ南にのみ開け、内に北上川・中津川および雫石川を抱く地形上にあり、自然環境に恵まれている。盛岡は日本の伝統的な城下町としての特徴を残しつつも、近年、都市化が進行してきており、盛岡の個性を活かしたまちづくりが求められている。

本研究は、城下町を起源とする盛岡市をとりあげ、位置特性、地形、動・植物、保存建造物、保存樹木、土地利用現況、歴史的環境、都市の特性等に関する資料調査をふまえて、現地踏査および都市空間のイメージ解析を行ない、盛岡市の都市像を追求したものである。

2. 研究の方法

本研究は、筆者等の提唱する「都市景観統合理論」¹⁾に基づいて進められたものである。これによると、都市景観操作の第1の目標は、骨格構造の明瞭な識別性（わかりやすさ）である（表-1のI）。そこで、まず最初に住民の抱いている都市のイメージを調査し（メンタルマップ法）、盛岡市の記憶素材の採集を行った。第2の目標は都市空間の骨格構造は脈絡をもって存在していることが必要である（表-1のII）。したがって、ここではIで集計したイメージマップを編集し、イメージしやすいコンテキスト（脈絡）、意味のあるコンテキストをつくりだした。こうして、全体に調和のとれた略面的都市像を描出し、それに言葉を与えた。次いで、第3の目標の要所の景観表現はその場所らしさを表現することである（表-1のIII）ので、IIで得られた景観のテーマと場所のデザイン基調の解釈を通して、場所の趣を生かした個性表現を行なった。最後の目標は、要所の景観表現は生き生きと説得力のあること、つまり視覚的形態の美しさへの要請であり、「修景」への要請である（表-1のIV）。なお、今回はこのうち略面的都市像の描出結果までについて述べる。

3・1. 都市記憶素材の採集

調査方法は、盛岡市に住む20歳以上の男女を対象に、調査員が被験者の家を直接訪問し、被験者本人に会って調査する直接面接法で行なった。本調査では、都市記憶素材の抽出法のうち都市イメージを包括的に把握するのに適しているイメージ再生法（メンタルマップ法）を用いて行なった。調査員は、A3版（29.7cm×42.0cm）の白紙（約7割りの大きさに枠を書き入れたもの）を被験者に渡し、盛岡市（周辺地域を含む）を自由に描かせた。作業の途中で枠からはみ出しても良いという指示を出し、調査用紙の枠による影響を除くようにした。調査地域は、盛岡市の都市計画区域内とし、盛岡城址中心として500mメッシュで区切り、その中から距離と方向を考えて14ヵ所をランダムに選んで調査した。本調査で得られたサンプル数は221であり、被験者の個人属性は表-2に示すとおりである。なお、調査期間は平成3年11月14日から12月29日である。

マップ法でイメージ再生された要素の空間的広がり種類を具体的な形で把握するために盛岡市（周辺地域も含む）のイメージマップをK. Lynchの都市イメージを決定する5要素に基づき作成した（図-1）。この解析により導きだされた盛岡市の空間特性の主なもの次は次のとおりである。

（1）東部丘陵地帯に大山高岳の景観を展望する自然風景が視点場として存在する

盛岡の東部丘陵地帯には身近な緑地が多く、レクリエーションの場としての利用頻度が高く、ここからの眺望のスケールは雄大である。田園地帯にとり囲まれて広がる市街地やその中をめぐる何本かの川、さらにはこの地域の主峰である岩手山をはじめとして街をやわらかく包みこむ周囲の山並みを一望することができる。

表-1 都市景観のカテゴリーと都市景観統合理論

カテゴリー	半球モデル	左 脳 (ロゴス(Logos)的)	右 脳 (パトス(Pathos)的)
		目標: 脈絡 (Context) 課題: イメージしやすいコンテキストの編集 [総合]	目標: わかりやすさ (Visibility) 課題: 都市記憶素材の採集 [分析]
骨 格 構 造	II		
景 観 表 現	III	目標: 個性 (Identity) 課題: 場所の個性表現 [分析]	目標: 修景 (Arranging Townscape) 課題: 美しさと生活感の演出 [総合]

表-2 被験者の個人属性

	男	女	合計
在住年数20年未満	54	58	112
在住年数20年以上	57	52	109
合計	111	110	221

街全体が自然風景のなかに溶けこむような街づくりこそ、好ましいとされる日本の伝統的な風景観が実感できる場所であり、盛岡の都市景観の背景を構成する要素として、これらの自然景観要素は不可欠の存在である。

(2) ランドマークとして仰ぎ望む盛岡城址が近傍に存在している

城下町盛岡発祥のシンボルとなる核心的な地区である盛岡城址は、都市部の中津川沿いに位置し盛岡のシンボルロード(内丸官庁街)にも接している。

(3) 中津川、北上川、雫石川の三河川の浅い流れが低い丘陵の間を流れている

盛岡は中津川、雫石川と北上川の三河川合流点にできた河岸段丘の地形を利用してつくられた街であるため、都市空間の骨格を形成するオープンスペースである河川網のパターンは個性的な放射状パターンをなしている。したがって、都市空間構造に方向性と焦点性がもたらされ、しかも各河川が兩岸地域の境界となって各地区を領域づけている。

以上は調査解析を通して得られた盛岡市のマクロ的なスケールでの空間特性の一端である。

3・2. イメージしやすいコンテキストの編集

昭和60年10月18日～11月16日に当研究室で行なった盛岡市の言語記述法によるイメージ調査の結果²⁾によれば大景展望の鹿兒島型の岩山緑地を中心とする自然景観、城址仰望の彦根型の盛岡城址、浅流低丘の京都型の中津川、北上川、雫石川からなる河川景観に対する評価が高く、次いで、湖の水の辺、文化施設、社寺景観、界隈の景観が評価されており、社寺を除く建築景観が下位グループを占め、街路と住宅地沿道の景観が最低の評価となっている。

上記の特徴的盛岡の景観の骨格ともいべき3つのタイプの自然景観は、随所に岩手山を借景として取り込むことによって各自の景観をひき締めつつ、それぞれでは視点場(見る地点)―視対象(見られる対象物)の相互の組合せとなって共存している。この点に盛岡の風景の特性があり、その優秀性を示すところとなっている。したがって、この3つのタイプの景観は相互になんらかの形で常に関連をもたせるように心がけ、その特殊な構造を強め、盛岡市のレジビリティを高めるよう編集した。湖の水の辺、社寺、界隈、橋梁周辺の景観は、都市景観のキーエレメントたるべく評価されており、都市に個性を添えるものとして、また、その他の盛岡市にモザイク的に分布している多くの歴史的景観は城下町を起源とする盛岡市のひとつの景観的特性を示しているものであるから、多様でしかも都市に奥行きを生み出す環境要素となるよう編集した。

また将来の都市の骨格となる西回りバイパスと盛岡駅西口から盛岡南新都市開発地域への主要幹線街路および、盛岡南新都市開発地域(ディストリクト)を加えた。こうしてできた略画的都市像に言葉を与え、「山と水と森のある歴史のまち、盛岡」を得た。

参考文献：1) 安藤 昭，五十嵐 日出夫，赤谷 隆一，脳機能を科学的基礎とした都市景観設計の体系化に関する研究，平成元年度東北支部技術研究会講演概要，pp. 388～389, 1989. 3

2) 安藤 昭，五十嵐 日出夫，赤谷 隆一，都市化の展開と都市景観イメージの解析，「地域学研究」第18巻，pp. 100～111, 1988. 11

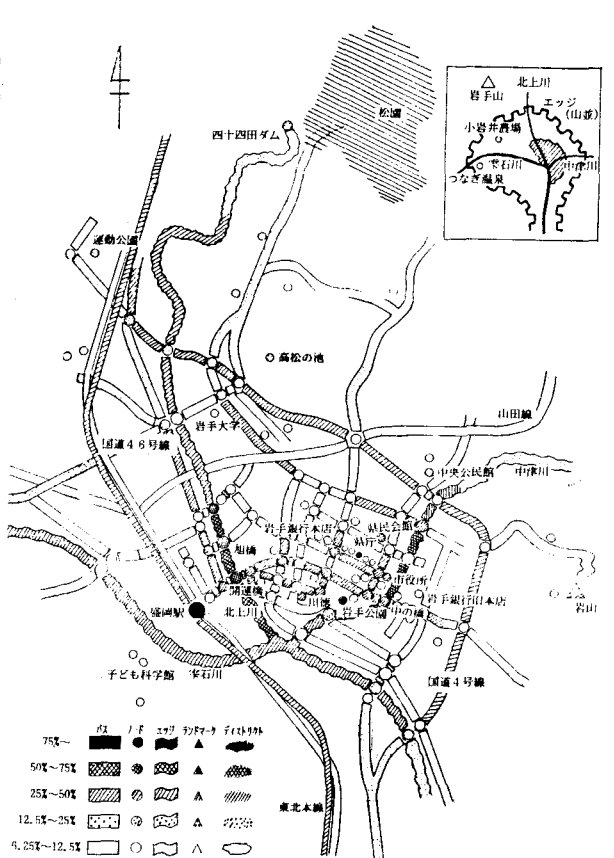


図-1 盛岡市のイメージマップ

図-1 盛岡市のイメージマップ。この図は、盛岡市の自然景観、城址仰望の彦根型の盛岡城址、浅流低丘の京都型の中津川、北上川、雫石川からなる河川景観に対する評価が高く、次いで、湖の水の辺、文化施設、社寺景観、界隈の景観が評価されており、社寺を除く建築景観が下位グループを占め、街路と住宅地沿道の景観が最低の評価となっている。

上記の特徴的盛岡の景観の骨格ともいべき3つのタイプの自然景観は、随所に岩手山を借景として取り込むことによって各自の景観をひき締めつつ、それぞれでは視点場(見る地点)―視対象(見られる対象物)の相互の組合せとなって共存している。この点に盛岡の風景の特性があり、その優秀性を示すところとなっている。したがって、この3つのタイプの景観は相互になんらかの形で常に関連をもたせるように心がけ、その特殊な構造を強め、盛岡市のレジビリティを高めるよう編集した。湖の水の辺、社寺、界隈、橋梁周辺の景観は、都市景観のキーエレメントたるべく評価されており、都市に個性を添えるものとして、また、その他の盛岡市にモザイク的に分布している多くの歴史的景観は城下町を起源とする盛岡市のひとつの景観的特性を示しているものであるから、多様でしかも都市に奥行きを生み出す環境要素となるよう編集した。

また将来の都市の骨格となる西回りバイパスと盛岡駅西口から盛岡南新都市開発地域への主要幹線街路および、盛岡南新都市開発地域(ディストリクト)を加えた。こうしてできた略画的都市像に言葉を与え、「山と水と森のある歴史のまち、盛岡」を得た。

参考文献：1) 安藤 昭，五十嵐 日出夫，赤谷 隆一，脳機能を科学的基礎とした都市景観設計の体系化に関する研究，平成元年度東北支部技術研究会講演概要，pp. 388～389, 1989. 3

2) 安藤 昭，五十嵐 日出夫，赤谷 隆一，都市化の展開と都市景観イメージの解析，「地域学研究」第18巻，pp. 100～111, 1988. 11